

会議議事録

事業名	平成26年度 「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成研修モデルの開発・実証
代表校	一般社団法人 全国専門学校教育研究会

会議名	第1回 アクティブラーニング分科会																																																						
開催日時	平成26年9月16日(火) 15:30~17:45																																																						
場所	グランドヒル市ヶ谷 東館2階「琵琶」(東京都新宿区市谷本村町4-1)																																																						
出席者	<p>①委員</p> <table border="0"> <tr> <td>岡村慎一</td> <td>専門学校YICグループ</td> <td>理事</td> <td></td> </tr> <tr> <td>伊藤慎二郎</td> <td>学校法人穴吹学園</td> <td>理事・副校長</td> <td></td> </tr> <tr> <td>小林昭文</td> <td>AL&AL 教育研究所</td> <td>代表</td> <td></td> </tr> <tr> <td>鈴木建生</td> <td>AL&AL 教育研究所</td> <td>研究員</td> <td></td> </tr> <tr> <td>三谷徹男</td> <td>株式会社CRI 中央総研</td> <td>代表取締役</td> <td></td> </tr> <tr> <td>信岡誠三</td> <td>穴吹医療福祉専門学校</td> <td>副校長</td> <td></td> </tr> <tr> <td>長谷川綾子</td> <td>富山情報ビジネス専門学校</td> <td>学科長</td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="3"></td> <td>計7名</td> </tr> </table> <p>②オブザーバー</p> <table border="0"> <tr> <td>永井真介</td> <td>富山情報ビジネス専門学校</td> <td>校長</td> <td>計1名</td> </tr> </table> <p>③事務局</p> <table border="0"> <tr> <td>花田香央理</td> <td>鹿児島情報ビジネス専門学校</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>飯塚久仁子</td> <td>有限会社ザ・ライスマウンド</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="3"></td> <td>計2名</td> </tr> <tr> <td colspan="3"></td> <td>参加者合計10名</td> </tr> </table>			岡村慎一	専門学校YICグループ	理事		伊藤慎二郎	学校法人穴吹学園	理事・副校長		小林昭文	AL&AL 教育研究所	代表		鈴木建生	AL&AL 教育研究所	研究員		三谷徹男	株式会社CRI 中央総研	代表取締役		信岡誠三	穴吹医療福祉専門学校	副校長		長谷川綾子	富山情報ビジネス専門学校	学科長					計7名	永井真介	富山情報ビジネス専門学校	校長	計1名	花田香央理	鹿児島情報ビジネス専門学校			飯塚久仁子	有限会社ザ・ライスマウンド						計2名				参加者合計10名
岡村慎一	専門学校YICグループ	理事																																																					
伊藤慎二郎	学校法人穴吹学園	理事・副校長																																																					
小林昭文	AL&AL 教育研究所	代表																																																					
鈴木建生	AL&AL 教育研究所	研究員																																																					
三谷徹男	株式会社CRI 中央総研	代表取締役																																																					
信岡誠三	穴吹医療福祉専門学校	副校長																																																					
長谷川綾子	富山情報ビジネス専門学校	学科長																																																					
			計7名																																																				
永井真介	富山情報ビジネス専門学校	校長	計1名																																																				
花田香央理	鹿児島情報ビジネス専門学校																																																						
飯塚久仁子	有限会社ザ・ライスマウンド																																																						
			計2名																																																				
			参加者合計10名																																																				
議題等	<p>1. 事業概要、及び事業内容の説明 伊藤委員</p> <p>2. 委員自己紹介 各委員 本日出席の各委員からの自己紹介、及び事務局からの挨拶</p> <p>3. アクティブラーニング手法の説明と導入方法 小林委員 今回が第1回目の委員会ということもあり、アクティブラーニングとはどのような授業手法なのかを具体的に小林委員より各委員へ説明がなされる。</p>																																																						

説明内容の概要としては、以下の通り。

① 新学習指導要領について

新学習指導要領で高校現場でも授業変更の動きがあり、この新学習指導要領では、総則のなかに「言語活動の充実」、「思考力、判断力、表現力の育成」という言葉が出てくる。

今までの学習指導要綱では、学習の目標を示すのが役割であり、授業のあり方の言及はなかったのが、今回初めて言及している。

② 反転授業について

平成25年の夏前からは、日本でも反転授業が取り上げられるようになった。従来の授業は先生が教壇に立ち、授業を行い、生徒が話を聞き、自宅で演習を行うというスタイルであるが、反転授業とは、自宅で行っていた演習問題は、学校で行うということ、そしてその授業スタイルは、生徒同士がグループとなり、教員は教壇から下り、生徒の横に立ち、学習者(生徒)に寄り添う導き手となることである。

これがアクティブラーニング的な授業を進める中で、教員の役割としての本質的な変更となり、ここが重視される場所である。

③ 小林委員の授業構成の説明について

65分間の授業配分は以下の通り

1. 学習内容の説明(15分)

パワーポイントで説明 スライドはプリントを配布するため、板書とノートはなし。これでインストラクションの時間を大幅に短縮できる。

2. 問題演習(35分間)

問題の回答と解説を同時配布し、すべてマスターするよう指導する。

3. 振り返り(15分間)

確認テストで全員が100点を取ることを目標とし、そのためには、生徒は質問を行ったり、立ち歩き相談し合うことも自由にさせる。これで確認テストをするとほぼ全員が合格し、最後のリフレクションカードを記入させて終わる。

このリフレクションカードを書かせることが非常に重要で意義がある。

④ この実験的授業の効果について

- ・センター試験で物理 I は7ポイントアップ
- ・選択者数が2倍、3倍増
- ・外部の教員からは、このような共同的な学習に関して、疑問と批判があり、教科書が最後まで終わるのかという質問を受ける。

今の子供たちは、教科書を最後まできちんと教えてもらったということでない不安になるため、最初から最後までやることを重視している。

実際は、板書ノートを減らすことや先生が説明しなくても生徒たちが読めば分かるところは、説明を省略することで授業スピードが早くなった。

- ・アクションラーニング(質問会議)の説明

グループで話し合わせるときのコントロールの仕方が大事で、グループワークを生徒たちに任せてしまうと、雑談をしたり、できる生徒に任せて黙っていたりと建設的な話し合いができず、概ね失敗する。

この状況に先生たちもどうしたらよいかわからないので、放置してしまう。

では、どのようにすれば効果的なグループワークが出来るのかというと、グループに質問で介入するという手法を取ることである。

この考え方は、ビジネス社会では一般的である。

それは、ピーター・M・センゲの「組織学学習開発理論」の中でも書かれている。つまり、学習する組織において、競争優位は個人と集団の両方の継続的学習から生まれるのであり、チーム学習は、組織学習の中核となる。このあたりのことをアクティブラーニング技法を行う教員が十分理解し、イメージをもって質問で介入していくということができるようになることが質の向上に繋がっていく。

もう一つの背景理論として、コルブの「経験学習理論」にある「体験する」(具体的経験) → 「振り返る」(省察的観察) → 「気づく」(抽象的概念化) → 「再計画」(実践的試み)というサイクルを回すということが必要である。この振り返りのきっかけが質問である。

つまり、先生が適切な効果的な質問をすれば、生徒たちは振り返り、そのことによって学習の仕方を学ぶ。

よって、アクティブラーニング型授業を専門学校の教員へ勧めるにあたり、アクティブラーニング技法の必要性や形の説明は概要のみにとどめ、具体的な授業の作り方は、専門学校で数多くの学科があり、それぞれの専門科目によって異なるし、また、資格取得型の試験に合格するための授業を行う学科があったりと様々あるので、そのいくつかのパターンを作るのは難しいだろうが、そこは現場教員に創意工夫して作ってもらうということにしながらも、より根本的な技法としての介入の技法は訓練し、できればアクションラーニングのコーチができるようになるまで訓練した方が、企業に入った時の学習する個人を育成するとか、学習する組織を作るとか、うまくいけば、授業の中で学習をする組織を作っていくことができるので、このあたりを伝えていきたい。

⑤ 小林委員からの上記説明内容に関して各委員からの質疑応答

4. 分科会役割担当決め

この分科会での各委員の役割が確定された。

5. 今後の委員会日程調整

第2回	10/30(木)	16:30~18:30
第3回	11/10(月)	16:30~18:30
第4回	12/1(月)	14:00~16:00
第5回	12/15(月)	16:30~18:30

実証講座

12/20(土)

12/21(日)

両日とも6時間 2日間 計12時間で実施

以上のことが話し合われ、17時45分に閉会となった。

以上